

ネパールヒマラヤの未踏峰 Tengi Ragi Tau (6,943m)

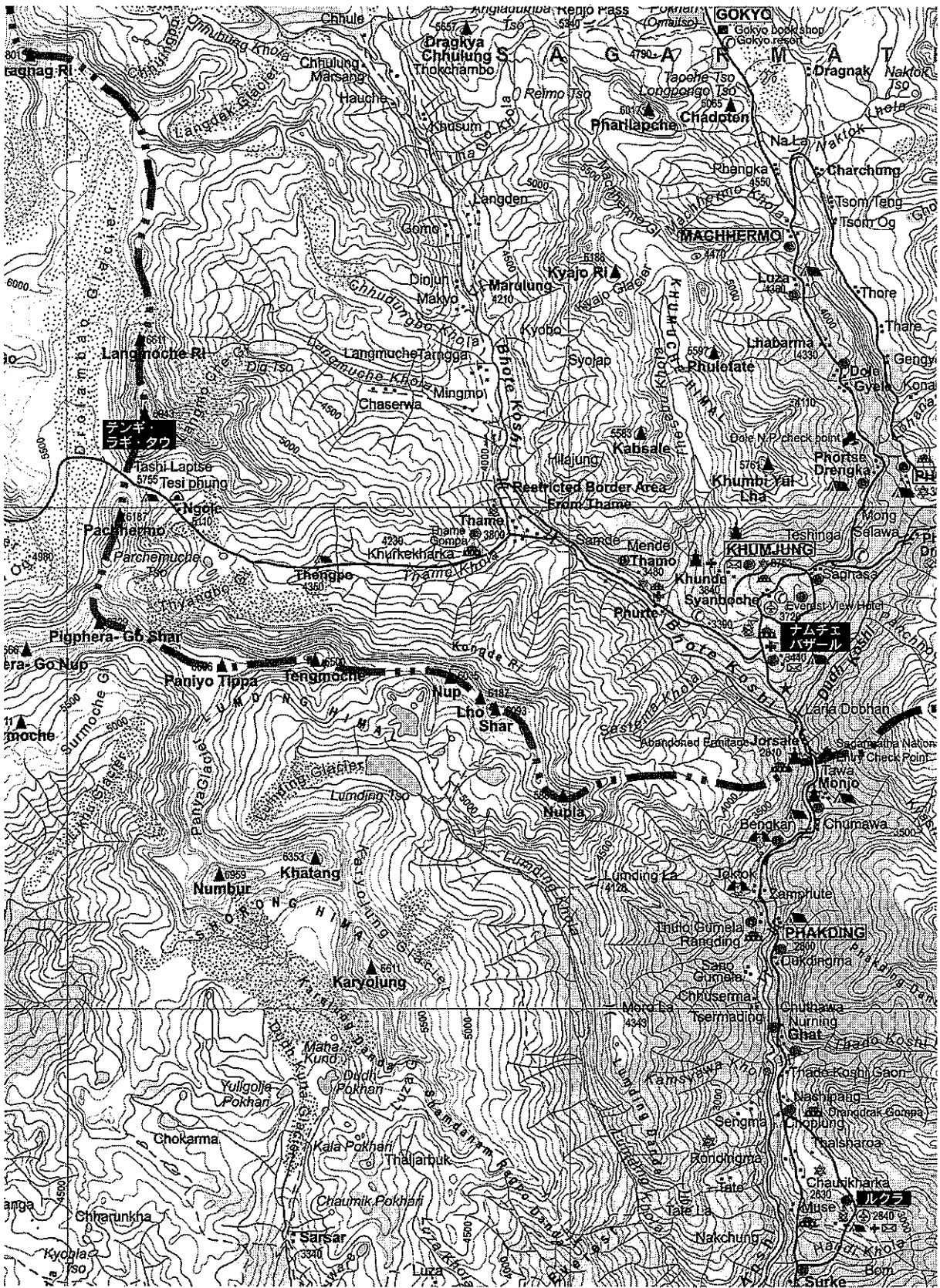
江崎 幸一 (北海道テンギ・ラギ・タウ登山隊隊長)

2002年春ネパール政府は103の山々を新たに解禁した。その裏には前年9月にニューヨークで起こった同時多発テロの影響があるようで、世界中を震撼させたアクション映画の映像かと思われるような貿易センタービルの旅客機衝突やその後のビルの崩壊は、テロの恐怖感を世界中の人達に植え付けるのに最も効果があったようで、中東をはじめ、パキスタン、ネパール等も観光客やトレッキング隊、登山隊が激減してしまったようだ。ネパールではマオイストによる内乱や発砲事件が数年前から大きく取り上げられていた為に、効果は抜群にあったようだ。首都カトマンズの繁華街タ

メル地区でも観光客の姿をほとんど見かけないようになってしまったし、どこのホテルも閑古鳥が鳴いていたようだ。

通常であれば、春に解禁された未踏峰にたいして秋季にはその山に挑戦する登山隊があつて当然であろうと考えていた。しかし、前述のようなテロの影響が大いにあったためか9月になってから登山申請したにもかかわらず北海道登山隊が最初のテンギ・ラギ・タウ峰の登山許可を得る事が出来た。準備期間は短かったが、5名の登山隊で出発にこぎつけ、未踏の頂きに挑戦した。その結果、4名が登頂し無事に目的を達成できたのは幸いで





テンギ・ラギ・タウ付近見取り図

4. 登山記録

ある。

10月20日、北海道千歳空港を発ち、その日の内にネパールの首都カトマンズに着く。

26日に空路ルクラに到着。ナムチェバザール、ターメを経由して11月3日にThyagb Glacier舌端の4,800mにBCを建設する。2000年の北海道エベレスト登山隊プレ登山の時と同じ場所だ。

11月5日、プジャの後、荷揚げと順応のためにテシラプチャ峠下のHIキャンプまで行く。この日、BCまで元気だった岩本隊員が急に体調を崩し、ターメ村に下った。

その後、体調の回復は出来ずそのまま日本に帰国することになってしまったのはとても残念である。

以後、隊員4名での登山活動となる。

11月6日、これから高度順応と西面偵察のために隊を2つに分ける。隊長とシェルパ2名はテシラプチャ峠を越して反対側のDrolambau Glacierへと向かった。

テシラプチャ峠の下りは浮石が多く歩き辛く危険を伴う。Drolambau Glacierの再度モレーンの中に一時的な前進キャンプ(ABC)を建設し、翌日氷河を逆登り、テンギ・ラギ・タウ峰の西面の偵察を行った。地図で尾根のように見えていたところは、岩の張り出した岩壁帯であった。

西面のどこかに弱点はないかと双眼鏡を片手にテシラプチャ峠とは反対側のコル(鞍部)まで行ったが、私達の実力にあった登山可能なルートを見つけることは出来なかった。

西面にルートが見つけれられる事を期待していただけに落胆は大きかった。

一方、残った隊員は、高橋をリーダーに順応のためのプレ登山をおこなった。パルチャモ峰へのルートを伸ばし、途中にC1を設けるなど登頂へ

の準備を進めていった。

11月9日、パルチャモ峰に登頂し、11月11日までは全員がBCに揃った。

西面にルートが見つけれなかったため、登山は振り出しに戻ってしまった。登攀は難しいと思っていた南東面にもう一度目を向けルートを探すことにした。改めて観察してみると壁のほぼ中央に顕著な尾根が中間まであるのが見受けられた。この尾根なら上部からの落石や雪崩にたいして安全そうに思えたので偵察してみることにする。

11月12日、隊長とシェルパ2名でテンギ・ラギ・タウ峰南東面の右端にある氷河を回り込むように登って行くとこの尾根をはっきりと見ることができ、安全性を確認する事ができた。取付きは岩登りから始まるが、3ピッチほど進むと、その後は右上に向かって雪の斜面となっている。この日は6ピッチ工作して先の見通しがついたのでBCに引き返した。

11月14日、ルート工作を効率よく行う為に標高5,300mの氷河上に新たにABCを建設した。翌日はC1予定地までルート工作をするつもりでパーティを組換え、江崎、恩田、シェルパ2名で出発する。

各自がフィックスロープとそれに必要なスノーバーやハーケン、ルート旗を分担して背負い出発する。前回の最終地点に着き、さらにルートを延ばす。雪壁の傾斜は徐々に急になってきたが雪の状態は悪くない。やがて、尾根に合流し雪稜を直上する。C1予定地の100m下まで工作して下山の時間となった。残った装備をデポしABCに引き返す。

11月16日、高橋、森下、シェルパ2名でさらに200mルートを延ばして戻ってきた。

BCに帰ってきた高橋の報告で安全な尾根はこ



下部のミックス帯にルートを開く

ここまでで、この先は常に上部からの危険にさらされる登攀になる事が確認された。

11月17日、天候は今日もいい。江崎、恩田、シェルパ1名でC1(6,050m)を設営する。45度の斜面を半日かかってテントを張れるようにカッティングする。最後は氷が出てきて大変だったが、安全で快適なC1が出来た。

その後19日、20日の2日間で高橋、シェルパ2名が6,400mまでルートを延ばしたので、いったんBCに全員が集合した。

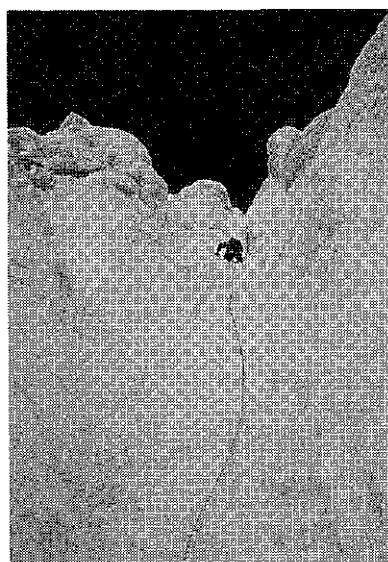
2日間休養の後、23日からは再びパーティ編成を組換えし江崎、高橋、シェルパ2名で登頂に向けて1回目のアタックに出発する。この日BCから標高差1,200mを一気に登りC1に入った。

11月24日、C1を午前3時に出発し頂上を目指す。しかし、ヒマラヤ巒の複雑な地形に惑わされ、壁の中で進むべきルートを見失ってしまい、6750mで進退極まってしまった。

まだ山頂まで標高200mはありそうだ。途中までロープやスノーバーを回収しながら懸垂で下り、200mほど下ったところで左のルンゼに変更して、先の見通しをつけたところで、回収してきたロー

プなどの装備をデポし、そのままBCまで戻った。

25日から風が強くなり、2回目のアタックに出発できるようになったのは28日だった。恩田、森下、シェルパ2名でC1入りし、翌日は前回同様午前3時にC1を出発した。テンギ・ラギ・タウ峰の稜線は全て巨大な雪庇が張り出しているために容易に稜線に抜け出ることができない。しかし、一箇所だけ雪庇が切れているところがあり、その1点を目指してルンゼの氷の斜面を直上して行った。ヒマラヤ巒のキノコ雪の間をうまく抜け、稜線に達することができた。そこは Drolambau Glacierが直ぐ下に見えるほど細い稜線だった。



ヒマラヤ巒のルンゼを攀る

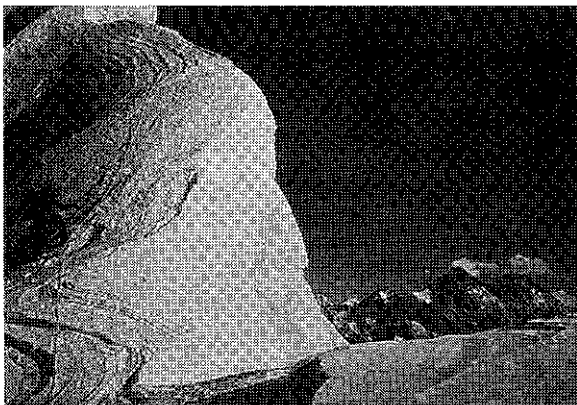
そこから頂上まで距離にして約250mを残し、2回目のアタックも時間切れとなり日が落ちると同時にC1に戻った。翌日からまた、風が吹き出し、全員BCに戻ったがテントのポールが折れるなど停滞を余儀なくされた。

12月3日、風が弱まったので江崎、高橋、シェルパ2名で3回目のアタックに出発する。その日のうちにC1に行き、翌4日午前3時にヘッドランプを点けてスタートする。

延々とユマーリングを続け、寒さで手足の感覚

4. 登山記録

がなくなりかけたころ背後の山端から太陽が顔を出し、南東面を登っているお陰で体に暖かさが戻ってくる。しかし、稜線に到達した途端、西側から強烈な風が襲ってきた。羽毛服の上にヤッケを着ているのに、震えが止まらない。この風の中を山頂までたどり着けるか一瞬不安がよぎった。あと距離にして250m、もう冬の季節風が吹き出している。今日登頂しなければ次のアタックはないと思い、頂上に向かって踏み出す。右側は10mもあろうかという巨大な雪庇が頂上まで連続して張り出し、左はDrolambau Glacierまで一直線に見える急峻な雪壁となっている。仕方なく不安定な雪庇の上にルートを伸ばす事にする。

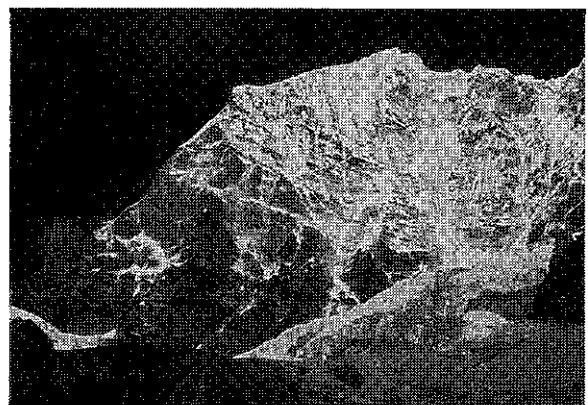


雪庇の上を進む。後方はエベレスト

頂上までに大きな雪庇の山が7つはある。雪庇を次々と越して行くと最後に出てきた頂上は比較的安定した平らな場所であった。稜線に到達してから2時間30分後の11時30分、私たちは夢にまで見たテンギ・ラギ・タウ峰の未踏の山頂に立っていた。反対側にも雪庇の稜線が続き、振り返ると今越して来た稜線の下方にパルチャモ峰が小さく丘のように見えている。西にガウリシャンカール、北に中国国境の山々、東にはエベレストやマカルーなどの8,000m峰がすばらしいパノラマで見渡せる。頂上での儀式を終え、早々に山頂を後にした。途中C1に入った2次隊の恩田、森下らに会い、祝

福の言葉を受ける。頂上までの注意点を彼らに伝え、明日の健闘を約してBCに向かう。頂上から標高差1,600mの壁を下り、BCに向かって歩いていると途中まで紅茶を持ってキッチンスタッフが迎えに来てくれた。真っ暗な中20時にBCに帰り着いた。翌5日には、C1に入っていた恩田、森下、シェルパ1名も登頂し、6日にはBCに無事帰ってきた。本格的な冬の強風が吹き出した合間を縫って登頂することができて幸運だった。

今回の登山の勝因はと聞かれば、第一に登山時期の選定がよかったことが上げられる。このルートは、この季節だから登頂できたと思う。この時期ネパールヒマラヤは乾季の時期を迎え、気候的には大変条件がよくなる。実際、我々が入山した10月26日から登山が終了した12月9日までに降雪があったのはわずかに2日間（5cmくらい）であった。雪の斜面は、冬に近づくにつれ徐々に氷に変わっていき、硬く締まってくる。この条件を利用して、登れるルートを研究すると、多くの可能性が生れてくると思われる。今回上部のルンゼを登っている間、雪崩や雪庇の崩壊があるものと覚悟を決めていたが、巨大な雪庇も崩れることはなかった。



南東壁全景

テンギ・ラギ・タウ登山隊 タクティクス

